

**主 題：主に喜ばれる歩みのための祈り②****聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章10節****テーマ：主に喜ばれる歩みを続けていくのに欠かせない要素とは何か？**

先週から私たちは、コロサイ1章、特に9-14節から、「主に喜ばれる歩みのための祈り」について考え始めましたが、きょうもその続きを学んでいきたいと思えます。その前にまず質問があります。皆さんは周りの人の歩く姿を観察したことはあるでしょうか？じっと見たことはないと言う人でも、おそらく普段目にする光景から、いろんなことに気づいているのではないのでしょうか。私たちの周りにはゆっくり歩く人がいれば、せかせかと歩く人がいて、キョロキョロ周りを見ながら歩く人もいれば、ずっと下を見ながら歩く人もいます。人それぞれ歩き方にはさまざまな特徴があるので、ネットでは歩き方から判断する性格診断が数多くありました。でもその歩き方から、もっと大切なことも見て取ることができます。例えば、足を引きずって歩いている人がいれば、足にけがをしているのだろうと考えますし、からだが歪んでいて歩いている人がいれば、何かの病を患っているのだろうと推察できます。私たちの歩き方は、その人のからだに何が起きているのかを教えてくれるのです。だからこそ、歩き方というのは、それぞれの生活においてとても重要な要素でした。

そして、これは実際の身体的な歩き方にだけに当てはまる話ではなく、私たちの霊的な歩みにおいても同じです。私たちが信仰者として、どのように日々を歩んでいるのかは、何よりも神様の前に重要な問題です。またそれが重要な問題であるからこそ、みことばは、どのように歩むべきなのかということもはっきりと示してくれているのです。きょうは、そんな“歩き方”について、一緒に考えてみたいと思えます。内容に入っていく前に、いつものようにみことばを読みします。

**コロサイ1：9-14**

「9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。：10 また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。：11 また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、：12 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。：13 神は、私たちを暗やみの圧制から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。：14 この御子のうちにあつて、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ています。」

さて、今回の内容に入る前に少し前回学んだことを思い出してみてください。先週私たちはコロサイの兄弟姉妹を思ってささげられたパウロの祈りを見ました。もうすでに主に喜ばれる教会として歩んでいたコロサイの教会、彼らがその状態で満足して立ち止まることなく、ますます成長し続けていくようにとパウロは願っていたのです。そしてそんな彼の祈りのうちに、私たちは特に主に喜ばれる者に成長していくために欠かせない六つの要素を見出すことができました。

**○主に喜ばれる歩みのために：欠かせない六つの要素****1. 神のみこころに関する知識に満たされること 9b節**

一つ目に欠かせない要素として挙げられていたものは、「神のみこころに関する知識に満たされること」でした。パウロはそのことを9節で述べていました。「どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」と。もうすでに神様に喜ばれる者として歩んでいたコロサイの兄弟姉妹たちが、神のみこころに関する知識で完全に満たされることを熱心

に祈り求めていました。みことばを通して明らかにされたその神様のみこころを彼らがますます個人的に知って、それによって生き方が支配されていくということを望んでいたのです。「頭でっかちになるような知識をたくわえてください」と話していたのではありません。その人の心が、神のみこころに関する個人的な知識であふれて、その歩みが得た知識によって知恵によって変えられていくということ、それこそが信仰者の成長に欠かせない一つ目の大切な要素だったのです。

## 2. 主にかなった歩みをしていくこと 10a 節

きょうは続けて二つ目の要素を考えてみましょう。パウロは、主に喜ばれる歩みをする者へと成長していくのに欠かせない二つ目の要素を10節の初めに挙げていました。「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、」と。欠かせない二つ目の要素、それは、「主にかなった歩みをしていくこと」でした。パウロは兄弟姉妹のために「主に喜ばれる者として成長し続けていくために、その主の前にふさわしい歩みをし続けていくように」と祈っていたのです。

ここでまず一つ覚えていてほしいことがあります。それは、私たちの持っている日本語の聖書ではなかなか読み取ることができませんが、実を言うとギリシャ語の原文では、10節は「歩く」という動詞で始まっていて、これには「何々のために」という目的を表す不定詞が使われています。言い換えると、パウロは「歩みをするために」とか「歩みをしていくために」ということばで10節を始めているということです。そしてこれはとても重要なことです。今頭の中で？が浮かんでいる人があるかもしれませんが、その人も少し流れを考えてみてください。先週私たちは9節で、パウロが「コロサイの兄弟姉妹たちが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされるように」と祈っている姿を見ました。既に主に喜ばれる教会として歩んでいた彼らが、みことばにはっきりと示された神のみこころをますます知って、ますますその知識にあふれていくことをパウロは願っていました。その流れで続く10節を見れば、やはりパウロの祈りは彼らがただ知識で満たされることをゴールとしていたのではない、ということがわかります。確かにパウロは「知識で満たされますように」と祈っていました。でもパウロが望んでいたのは、兄弟姉妹たちが単にたくさんの知識をたくわえることではありませんでした。彼らが知識に満たされるということには、ある目的がありました。ある別のゴールがあったのです。それこそが、彼らが「主にかなった歩みをするため」だったのです。コロサイの信仰者たちが知識や知恵に満たされてそれで終わりではなく、それによって主にふさわしい歩みをする者へとさらに成長していくということ、これこそがパウロが何よりも祈っていたことでした。「神のみこころに関する真の知識に満たされますように、主にかなった歩みをするために。」と。

ですから、「キリストによって救われた者が、知識として知恵や教を増し加えていくということ」と「それにますます従って生きていくということ」この二つはどちらも切り離すことができない重要なものでした。たくわえたもので実際に生きていくということは、非常に重要なことだったのです。だからこそ、そのような主にかなった、主にふさわしい歩みをしていくという生き方は、ほかの聖書箇所の中でも繰り返し教えられているのです。パウロもこのコロサイの中だけではなくて、ほかの信仰者たちに対しても同じように求めていました。思い返してみると、彼はエペソの教会に対してもこのよう述べていました。エペソ4：1「さて、主の四人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」テサロニケの教会に対してもこのように命じていました。Iテサロニケ2：12「ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」またそれだけではありません。ピリピの教会に対しても同じように求めていました。ピリピ1：27にもこう書いていました。「ただ一つ。キリストの福音にふさわしく生活しなさい。」と。

「召しにふさわしく歩んでいきなさい」「神様にふさわしく歩んでいきなさい」「キリストの福音にふさわしく歩んで行きなさい」と。そのように繰り返し命令がなされていたのです。またそのような命令だけではなくて、実際に神様にふさわしい歩みをしていた人物の姿をみことばの中に見て取ることもで

きるのです。例えばⅢヨハネの中でも、ガイオという人物の愛にあふれた働きを喜んだヨハネが、こんなことばを記していました。Ⅲヨハネ 1、5-6 節にこう記されていました。「:1 長老から、愛するガイオへ。私はあなたをほんとうに愛しています。…:5 愛する者よ。あなたが、旅をしているあの兄弟たちのために行っているいろいろなことは、真実な行いです。:6 彼らは教会の集まりであなたの愛についてあかししました。あなたが神にふさわしいしかたで彼らを次の旅に送り出してくれるなら、それはりっぱなことです。」こうして聖書を見ていけば、キリストを愛する者にとって主になつた歩み、主にふさわしい歩みというのは欠かすことのできない要素でした。さらに言えば、みこころに関する知識で満たされて、主にふさわしい歩みをし続けていくというのは、私たち自身も祈り求めていくべき、この世での私たちに与えられた大きな目標になるのです。

では皆さん、ここで少し立ち止まって考えてみてください。それぞれにとって主に喜ばれるようなふさわしい生き方をしていくということが大切なのはよくわかりました。おそらくもう多くの方々がすでにそのことを知っておられると思います。では、「そもそも、主になつた歩み、主にふさわしい歩みというのは具体的にどのように生きていくことを言うのでしょうか？」とだれかに聞かれたら、皆さんならどう答えます？また、答えるだけではなくて、果たして私たちはその目標を正しく覚えて、今ますます成長し続けているのでしょうか？このことを正しく理解するために、きょうはパウロの祈りに登場していた二つのことばに注目して考えてみましょう。もう一度コロサイ 1：10 を見ていただくと、こんなことばが出てきていました。「また、主になつた歩みをして」と。

### ●主になつた歩みとはいったい何か？

#### ▷「歩みをして」

一つ目に注目して見ることばは、パウロがここで述べていた「歩み」ということばです。彼はコロサイの兄弟姉妹たちが歩んでいくことを祈っていました。ここで用いられていた「歩みをする」ということばは、皆さんが想像できるように「ここからあそこまで歩いて行く」とか「自分の足で歩きまわる」などの文字通りの意味も含まれています。でもそれ以上に「歩む」と言う場合、「ある決まった生活をする」とか「習慣としてふるまう」といった、その人の継続した生き方そのものを表す意味として、聖書の中で用いられているものでした。私たちがいろんな箇所を見たときにその様子を見て取ることができます。例えばローマ 13：13 ではこのように訳されていました。「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。」と。ここで「正しい生き方をしようではありませんか」というこのことばが、「歩む」と同じものになるのです。生き方ですと。Ⅱテサロニケ 3：6 にもこう書いていました。「兄弟たちよ。主イエス・キリストの御名によって命じます。締めりのない歩み方をして私たちから受けた言い伝えに従わないでいる、すべての兄弟たちから離れていなさい。」と。パウロは言います。「締めりのない歩み方をしているような人たち、締めりのない生き方をしているような兄弟たちから離れていなさい。」と。つまりこれは一時的なものではありません。繰り返されているものです。すぐにやめてしまうものではありません。継続的なものです。「歩む」というのは、普段の生活でどのようにふるまって、どのように考えているのか、その人の習慣となっている生き方のことを表現しているのです。その人が継続的に行っていること、その人の習慣となっている生き方のことを「歩み」ということばは表していました。パウロはこの箇所でもそのことばを用いたのです。「主になつた歩みをして」と。言い換えれば、パウロはコロサイの兄弟姉妹たちが知識に満たされて、それによって彼らが習慣的な生き方、継続的な生き方をしていくことを祈っていたということです。もちろん道の途中でつまづいてしまうこともあれば、失敗してしまうこともあるでしょう。正しい道から逸らせようとする敵や誘惑もあるでしょう。でもそれでもなお、コロサイの兄弟姉妹たちが継続的に歩み続けていくということを、パウロは心から願っていたのです。主にふさわしい歩みを、主になつた歩みをす

るといふ、その一つの方向を目指して一貫して成長し続けていくということ、それこそが救われた者にふさわしい生き方でした。主に喜ばれる、主にかなった、主にふさわしい歩みをするという、その一つの方向を目指して、継続して生きていくことです。

そしてそのような生き方は、今の私たちにも同じように求められていることです。キリストによって救われたのなら、私たち自身も今、同じ目標を持って生きているのです。主に喜ばれる者として、主の前にふさわしい歩みを継続的に成していく、そんな責任をそれぞれが負っているのです。でもここでまたある疑問が出てきますね。最初にも問うたことですが、そのようにして継続的に歩いていく、目指していく、主にふさわしい歩みとは、そもそもいったい何ですか？主にかなった歩みをする者として成長していくというのは、具体的にどんな生き方をしていくことなのですか？と。

## ▶「主にかなった」

では、もう一つのことばと一緒に考えてみましょう。それはもちろん、「主にかなった」「主にふさわしい」ということばです。ここで「かなった」と訳されていることばは、「何かにふさわしい」「何かに適している」とか「何かに値する」といった意味で頻繁に用いられています。でも、ここで皆さんに覚えて欲しい、興味深いことというのは少し別のところにあります。このことばはもともと、「何かを測ること」や「天秤にかけること」といった「秤」を表すものに由来していると考えられています。少し想像してみてください。このことばは、「一つの物を天秤の片方に載せて、もう片方に別の物を載せて、その二つの違いを比べてみたり、またそれに加えて、重さに違いがある二つの物に重りを加えることで、均等にしようとする」といった意味を持っているのです。これは具体的に見た方が分かりやすいと思います。どのように聖書の中で登場しているかと言うと、ローマ8：18ではこのように使われています。「今の時のいろいろな苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に**比べれば**、取るに足りないものと私は考えます。」と。この場所で「比べれば」と訳されていたことばが、「かなった」「ふさわしい」と同じ意味を持ったことばになるのですが、この箇所パウロはいったい何を言わんとしていたのでしょうか？パウロは今の時のいろいろな苦しみを天秤の片方に載せて、将来啓示されようとしている栄光をもう片方に載せて、二つのものの違いを比べていました。そして彼は言うのです。「これら二つのものは同等ではない、これら二つのものは同じ価値があるものではない。」「信仰者の今のさまざまな苦しみというものと、将来の栄光というものを比べたときに、それは比べ物にはならないのだ。」と。パウロはそのように違いを捉えて、このことばを使っていたのです。

では、コロサイに戻って考えてみてください。パウロは10節で「**主にかなった歩みをして**」と語っていたのですが、これは何を意味していたのでしょうか？簡潔に言えば、パウロはここで二つのものを比較して、二つのものを均等にしていくことを求めていました。重さの足りていない方に重りを加えて、それらが次第に均等になっていくことを願っていたということです。つまり、信仰者たちが、自分自身の歩みと、主を比べて、主によりふさわしい者へと、主と同じ重さへとなっていくことを求めていた、というわけです。主を片方に載せて、自分自身の歩みをもう片方に載せれば、重さの足りていない方にますます重りを載せて均等にしようとするということ、主により似た者へとなっていくということ、それこそが主にかなった、主にふさわしい歩みでした。

少し立ち止まって考えてみてください。果たして私たちの日々の歩みというのは、主にかなった歩みなのでしょうか？先週の歩みを振り返ったときに、私たちはますますキリストに似た者になりたいという願いを持って歩いていましたでしょうか？ほかのものと比べているのではありません。私たちが、愛する主と自分自身を比べて、足りないところを気付くから、主にふさわしい者へとになりたい、というそんな忠実な生き方をしていたのでしょうか？それとも、私たちは私たちの主を見るのではなくて、何かほかのものを見てはいなかったのでしょうか？先週、どれだけ私たちは愛する主の姿を正しく覚え続けていたで

しょう？もちろん皆さんもよくご存じの通り、私たちはこの地上での生活において、罪のない完璧な者となれるわけではありません。完全な主と全く同じようになれるわけではありません。救われた後も悲しいことに日々さまざまなものに葛藤を覚えたり、それらに敗北してしまうことがあります。間違っているとわかっているにもかかわらず、誘惑に負けて罪を犯してしまうことがあります。神様を悲しませることを平気でしてしまうこともあるのです。でも、だからこそ主にお会いするその時まで、私たちは罪と戦い続けていこうとするのです。ヨハネもこのようにはっきりと述べていました。Iヨハネ3：2-3「2愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。3キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と。いつの日か私たちが主にお会いする日はやって来ます。もう罪で苦しまなくていい、栄光のからだへと変えられる日が将来必ずやって来るのです。思い返してみてください。本来なら私たちには神様の愛も救いも何一つとして値しませんでした。罪の中に死に、神様の敵として頑なに歩んでいた私たちすべてにとっては、ただ神様の正しいさばきだけがふさわしいものでした。でもそんな私たちに、ただ恵みとあわれみによって救いが与えられ、将来におけるすばらしい約束までもが与えられたのです。そうであるならひとりひとりの責任は、必ずやって来るその喜びの日まで、主にかなった、主にふさわしい歩みを忠実に成していくということです。キリストと自分自身を比べて、その差が次第に縮まっていくように、まるで重さが均等になっていくかのように、そのことを目指して成長し続けていくことです。いつの日か完全に似た者になるその日を楽しみにしながら、今も少しでも愛する主に似た者へと変わり続けていきたいと願って、忠実に今を歩み続けていくことです。それこそ私たち信仰者にとってふさわしい生き方でした。

さて皆さん、私たちは主にかなったふさわしい歩みがどのようなものなのかを少しだけ考えました。でもある人はまだこう思っているかもしれません。キリストに似た者へと次第に変えられていくと言うけれど、もっと具体的に言えばどういうことなのですか？私たちの実際の歩みの中ではどういうふうに見られるのですか？と。もしそう考えておられるならすばらしいことです。もちろん私たちが目指していくべきキリストの姿に関しては、いろんなことを挙げるすることができます。皆さん自身も今、あらゆる面で主を喜ばせる者として成長していきたいと望んでおられるはずです。多くのことをこの限られた時間に挙げることはできませんが、その中でも特に二つ、具体的な例を考えてみましょう。キリストにふさわしい、主にかなった歩みというのはどういう歩みなのかをよく考えてみましょう。

#### a) キリストに見られる“謙遜”

まず一つ目に挙げるとすれば、それは“謙遜”です。以前一緒に学んだ箇所の一つでもあります、ピリピ2：3-8にこう書いていました。「3何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。4自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。5あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。6キリストは、神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、7ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。8人としての性質を持って現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」と。改めてキリストのうちにはっきりと示されていた謙遜の姿を考えてみてください。思い返してみれば、この世に誕生されたイエス様というのは、ありえないほどご自身をへりくだらせたお方でした。そもそもこの方は、紛れもなく永遠の初めから存在しておられた、栄光にあふれた神の御姿である方だったのです。単なるひとりの預言者ではありません。イエス様は良い教師のひとりでもありません。最高の御使いのひとりでもなければ、神様に限りなく近い存在でもありません。イエス様は疑いようもなく、栄光にあふれた神様ご自身でした。この方こそ、世界のすべてが存在する前から永遠に存在し、圧倒的な力を持って世界のすべてを創造された、並ぶもののないまこ

との神様だったのです。でもこんな偉大な神様が、完全な人となられました。確かに神様であるお方が、そのあり方を捨てられないとは考えずに、仕える者としてこの世に来られたのです。それだけでもすばらしい、考えられないようなへりくだりでした。でもそれだけではなくて、この方は罪を除いて、確かに私たちと全く同じ人としての性質を持つ者となられたのです。以前も考えましたが、この世界のすべてを造られた力あるその創造主が、両親の助けを必要とする無力な小さな赤ん坊としてお生まれになって、全能の力を持つそのお方が、私たちと同じように疲れや弱さを覚えて休息を必要とする者となられ、だれの助けも必要としない人の手によって仕えられる必要などいっさいないそんなお方が、飢えや渴きを味わって弱さを覚える者になったのです。イエス様は変わらず神様でした。だからこそ罪を犯すことはありませんでした。それでもすべての点において私たちと同じように試みに遭われ、ひどい苦しみに直面することもあったのです。本来なら永遠なる神様であるイエス・キリストは、そのどれにも値しませんでした。でもこの方はみずから進んでご自分を無にして、喜んで自分の持っている神様としての特権を横に置いて、この世に来てくださったのです。これを考えても、この方がどれほどご自身をへりくだらせたのかということは、私たちの理解をはるかに超えるものでした。

でもそれですべてが終わりではなかったのです。この方の謙遜はそこで終わりではありませんでした。人としてこの世に来られたイエス様は、ご自身を卑しくし、そして最後には実に十字架の死にまでも従われていきました。繰り返しになりますが、イエス様は初めから変わらない神様でした。人となられた時も変わらない神の栄光の輝きでした。だからこそ、本来ならただ誉れと賛美のみ値するお方だったのです。もちろんこの方はご自分の思いのままにすべてを行う力も権利も持っておられました。それが当然この方に値するものだったのです。ましてやこの方は十字架の上で父なる神様ののろいや御怒りを味わう必要など、決してありませんでした。しかしこの方はご自分のことをいっさい顧みることなく、喜んでみずから十字架にかかれたのです。本来なら、当然私やあなたの上に注がれるべき罪の罰を、この方が身代わりとなって十字架の上で受けて下さいました。罪に対して燃え上がる神様の御怒りを、身代わりとなってなだめてくださったのです。罪の全くないお方が、永遠の初めから持っておられた父なる神様との交わりから引き離されて、その身に御怒りを受けられたというこの事実は、私たちには到底理解も想像もできないほど測り知れない苦しみでした。だから皆さん、思い出してください。イエス様は十字架から叫ばれたのです。マタイ27：46に「わが神、わが神。どうして私をお見捨てになったのですか。」と。このことばを覚えるとき、いったいイエス様はどれほどの苦しみを味わわれたのか？神の御子はどんなに大きな犠牲を払われたのか？どんなにこの方はご自身をへりくだらせたのか？と考えるでしょう。でもこうして尊い犠牲があって、私たちの罪の問題は解決されたのです。キリストの謙遜こそが、私たちにとってのすべてでした。

そして、そんな謙遜を私たちが知っていると言うなら、パウロは言うのです。「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。」と。パウロは「いろんな謙遜があるのでその中から選びなさい。」などとは一言も言っていません。「あなたが考えるような心構えでいなさい。」とも言いませんでした。パウロが言っていたのは、「キリスト・イエスのうちに見られるものを、あなたがたはその心構えを持っていなさい。」と言ったのです。言い換えるなら、「キリストのうちに見られる謙遜にふさわしい、かなった歩みを、ますます成していきなさい。」ということです。キリストが進んで犠牲を払われたように犠牲を払って、キリストがご自身の権利を主張することなく喜んで神様や人に仕えられたように仕えていくということ、それが私たちにも、求められていることでした。

そうだとすれば皆さん、私たちがキリストの謙遜を天秤の片方において、自分自身の謙遜をもう片方に置いたとき、私たちはどんな点においてまだまだ欠けているのでしょうか？また、（私たちは当然いろんなところで欠けているのですが）それら二つの差というのは、私たちがますます成長することによっ

て、次第に縮まってきているのでしょうか？違っている、ということを理解することはもちろん大切です。でも、私たちはそこで止まりません。私たちは主を愛しているからこそ“謙遜”においても成長していこうとするのです。果たして私たちの謙遜は、ますますキリストの謙遜に似たものへと変えられてきているのでしょうか？

#### b) キリストにみられる“犠牲的な愛”

また、もちろん謙遜だけではありません。例えばそれに加えて“犠牲的な愛”はどうでしょう？間違いなく、これもキリストのうちにはっきりとて現されていたものでした。この方は紛れもなく人々のために喜んでご自身をささげて、大きな愛を示された方だったのです。いろんな箇所で見ることができますが、例えばエペソ5：2にもこのように書かれています。「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」またIヨハネ3：16にもこう書いていました。「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と。「キリストも愛を示されました。キリストは、私たちのためにご自分のいのちをお捨てになりました。それによって愛がわかりました。その愛に倣って生きていきなさい。」と。この主の愛というのは、自分が気に入っているような人だけに示されたものでもなければ、何の価値もない、どうでもよいものをささげられたのでもありませんでした。イエス様は、本来ご自分の愛に決して値しない愚かな罪人のために、彼らが最も必要としていた救いを、ご自身のいのちを犠牲としてみずから進んで払われたのです。

そして私たちがその愛を信じたのであれば、私たちも同じように、キリストのうちに見られる犠牲的な愛にかなった歩みを、ふさわしい歩みを追い求めていく責任を負っているということです。皆さん、私たちが考える愛を追い求めていくのではありません。この世が考えているような愛を追い求めていくのでもありません。私たちが愛してくださったその方の模範に倣っていくということです。自分を愛してくれる者だけを愛するのではありません。自分を傷つけ悲しませるような者に対しても、愛を示すのに値しないように思える人に対しても、みずから進んで犠牲を払って愛を示そうとするのです。私たちの肉は言います。「そんなことはできません。」と。でも私たちがキリストを見ると、キリストはもうすでにそれをしてくださったのです。その愛を私たちが知ったのであれば、私たちはその愛を実践していこうとするのです。果たして私たちの愛は、主が愛されたような愛に似たものへ、ますます変えられ続けてきているのでしょうか？

ここで皆さんに覚えてほしい大切なことがあります。主にふさわしい、主にかなった歩みを日々目指していく上でも、絶対にカギになることです。それは、私たちはいつも秤にかけているものが何かを忘れてはならない、ということです。別のことばで言い換えるなら、私たちは、比べるキリストの姿をどんなときも正しく覚え続けなければならない、ということです。私たちは、私たちが模範とする、私たちが比べるキリストの姿を、いつも正しく覚え続けなくてはなりません。これはもしかしたら当たり前のように聞こえることかもしれませんが、でも非常に重要なことです。なぜならもし私たちが、主にかなった、主にふさわしい歩みをしようと願っているにもかかわらず、そもそも、主の姿に心を留めていないとすれば、どうなるでしょう？例えば、ある人が、自分勝手に考えている謙遜と、自分自身の謙遜を比較して比べながら、どうにかして謙遜において成長しようと思っていれば、どうなるでしょう？ある人が、世の中が考えているような愛と自分自身の愛を比べて、どうにかして世の中の愛のようなものに成長しようとしていたらどうなるでしょう？その歩みは当然、主にかなったものにはならないのです。キリストに似た者にますます近づいていくことにはならないのです。目指すべき目標から目を逸していながら、ゴールにたどり着くことなどできないということです。だからこそ、主にかなった歩みをして、主にふさわしい歩みをして、主を喜ばせる者として成長し続けていくためには、どんな時もま

ず、キリストの姿を覚えることが欠かせないということです。そして皆さん、忘れてはいけません。ほかのだれでもない主が最初に、私たちに“謙遜”とは何かを示してくださいました。それによって救われた私たちは、その“キリストに見られる謙遜”を追い求めて行こうとするのです。ほかのだれでもない主が最初に私たちに“犠牲的な愛”とは本当は何なのかを教えてくださいました。それによって神様の子だとされた私たちは、その“キリストに見られる犠牲的な愛”を追い求めていくのです。私たちに示されたその謙遜も愛も・・・主が私たちに示してくださったものを私たちは目指していくのです。

だからもし、まだへりくだられた主キリスト・イエスの愛を自分のこととして知らない方がおられるなら、何よりもまずそれを知ってください。きょうというこの日、私やあなたのような罪人のためにご自身のいのちをささげてくださった、そんな救い主のあわれみを知ってください。この救い主のあわれみを求めてください。イエス・キリストのうちにのみ、罪の赦しがあります。だからこそ、この偉大なお方の前に自分の罪を悔い改めて、この方を自分の救い主、主として信じ受け入れてください。そして自分のために測り知れない犠牲を払ってくださったこの方を愛して、この方が喜ばれる、この方のためにすべてをささげて生きていく、そんな人生を始めてください。この主を本当に知るということにこそ、最高の喜びがあります。

また、すでにこの主を愛しておられるという兄弟姉妹の皆さん、果たしてそれぞれは主にかなった、主にふさわしい歩みをする者として、今ますます成長し続けているのでしょうか？私たちが考えるのではありません。キリストに私たちは似た者として変わり続けているのでしょうか？それとも、もう何か旅路が終わってしまったかのような歩みをしてはいないのでしょうか？確かにこの地上での生活において、私たちが罪のない完璧な者となるわけではありません。救われた後も、私たちは日々さまざまな葛藤を経験し、罪を犯してしまうこともあります。私たちは完璧とは程遠い存在でしかないのです。でも、だからこそ、いつも私たちの愛するキリストを見上げて、この方の偉大さを、この方が成してくださったそのすばらしいみわざに目を留め続けることです。いっさい希望のなかった私たちを救い出してくださいましたこの方を心から愛するからこそ、この方が喜ばれることを、熱心に追い求めていくことです。あらゆる点において私たちはキリスト似た者へとますます変えられていくことを目指していくことです。

そして最後に皆さん、もちろん主の前にふさわしい歩みをしていくというのは、ひとりひとりに神様が与えられた大切な責任です。でもここで覚えていて欲しいのは、パウロはそのことをコロサイの兄弟姉妹のために祈っていたということです。ますます主にかなった歩みをしてあらゆる点で主に喜ばれるようにと、パウロはほかの信仰者のために心から祈っていました。私たちも同じです。私たちも互いのために祈り合うことができます。私たちはみな、同じ目標を目指して歩んでいるのです。みな、いろんな問題を抱えています。でも同じようにしてキリストによって救われた私たちは、同じ愛を知ったからこそ、同じ謙遜を見たからこそ、それを目指して歩んでいこうとするのです。そのためには、互いに助け合って、祈り合っていくことが絶対に欠かせません。神様の助けなしには私たちは何もできないのです。だからこそ、ともに祈りながら、神様の助けを求めながら、みことばに記された神様のみこころを求めて、ともに成長していきましょう。